

『敵討身代利名号』—翻刻と解題—（上）

* 中 尾 和 昇

要 旨

本稿は、文化五年（一八〇八）刊の馬琴合巻『敵討身代利名号』を翻刻・紹介するものである。

本作は、親鸞上人の十字名号による「身替り」の趣向をテーマとする仇討譚である。筆者は以前、馬琴が如何にこの趣向を消化し、自身の読本作品内に機能させたかについて論じたことがある。ただ、そこでとりあげた「身替り」は、他者の難を救うために、その代わりとなって死ぬという演劇由来のものであり、本作に見られるような神仏靈験譚は中心として扱ってこなかった。管見によれば、神仏靈験譚の「身替り」は読本よりも、むしろ合巻に多く見られることがわかった。今回取り上げる『敵討身代利名号』は、この趣向を前面に押し出した作品として注目される。本稿をなす所以である。

キーワード：曲亭馬琴、合巻、演劇、身替り

紙幅の都合上、今回は書誌および前編の翻刻のみを記すこととする。

なお、凡例は本紀要の第四十五号掲載の拙稿「曲亭馬琴『縁結文定紋』

—解題と翻刻—（上）」を参照のこと。

一 書誌

底本 蓬左文庫蔵本（尾16-20）。本文は国立国会図書館蔵本、東京都立中央図書館蔵本によって校合した。破れ・汚れの目立つ部分については、他本で補い、その旨を図版の下に記した。

刊年 文化五年（一八〇八）。

画工 葛飾北斎。

筆工 不明。

版元 鶴屋喜右衛門（仙鶴堂）。

形態 中本。六卷三十丁一冊（前編と後編を合綴）。

寸法 一八・三×二二・七糎（表紙）。一四・八×一一・二糎（匡郭）。

表紙 桜鼠色無地（後補表紙）。中央に無辺題簽「敵討身代利名号 完」（麻の葉繋ぎ紋様、水色）を貼付。

後表紙
表紙と同じ。

柱刻 一丁～十五丁は「みがはりの前へん 一（～十五）」、十六丁

～三十丁は「みがはりみやうごう後へん 十六（～三十）」。

その他 原表紙（前後編各一枚）を綴込。原表紙は錦絵摺付。表記は

「つる喜板」「身がはり」「前編」「つる喜板」「みやう

ごう」「後」（後編）。また、本文丁の後に鶴屋喜右衛門の新

刊広告を綴込（二丁分）。



写真1 後補表紙



写真2 原表紙（前編）



写真3 原表紙（後編）

二 翻刻

「見返し」

曲亭馬琴著 戊辰発兌全六冊

敵討身代利名号 同道異教（枕字）

葛飾北斎画 書肆仙鶴堂繡梓

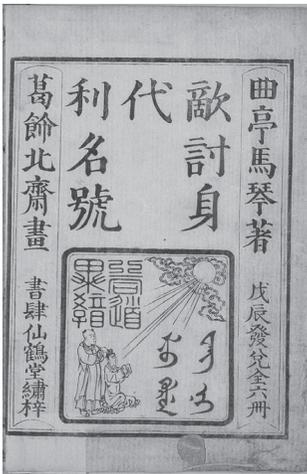


写真4 見返し

「1オ」（振り仮名・句読点は原本のまま）
 輪廻りんまわ應報おうほうの言こと。誣しゆべからず。十字じうじ体代かはりみやう名号なごうのごとき。見けんに相州さうしう宮川みやがわにあり。往まぎに予よ。船ふねを彼浦かのうらに歇かて。親したくこれを観みたり。因近よつこの属らその家いへ口碑こうひに伝つたふる趣おもむきに做なら。更さらにこの冊子さうしを作る。事ことは荒唐くわうたうに庶ちかくして。もつはら烏有うゆう氏しに仮托かたくすといへども。因いんを推果おしくわを示しめし。善ぜんを勸すすめ悪あくを懲こらしにいたつ。亦是またこれしやうせつしやう。老婆らうば心しんならん歟か。

文化五年戊辰孟春 曲亭馬琴叙 印

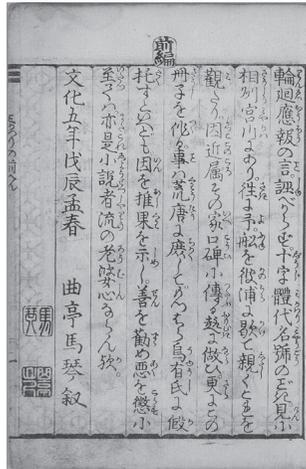


写真5 1オ

「1ウ2オ」（振り仮名は原本のまま）

秋来あき只怕おそ雨垂あめ々々 甲子かろし無雲むぐも萬事ばんじ宜よろ 穫稻とく畢ひ工こう隨曬ずいざい穀こく 直須ちよく晴到はる入倉いらくら時とき

右范石湖 秋日田園雜興
 藤坂実太郎 蜘蛛塚治部九郎



写真6 1ウ・2オ

「2ウ3オ」（振り仮名は原本のまま）

鋤禾あき日当午 汗滴あせ禾下土 誰知たれ盤中食 粒粒つぶ皆辛苦

右唐聶夷中句
 蜘蛛手婆々 貌美葉

〔3ウ4オ〕
 応永年中、足利左馬の頭氏兼朝臣、鎌倉の管領たりし頃、相州なごや村に、藤坂知右衛門といふ郷侍ありけり。由緒も正しく、身上も相応にて、男女五六人を召し使ひ、殊更、譜代念仏の信者にて、何不足もなかりしが、年五十に余れども、子といふもの一人もなく、妻も近頃世を去りしかば、いよく老の心細く、「何とぞ、武芸に心がける若者のを養子にせん」と、しきりに尋ねける折しも、なごや村の村長、由の右衛門といふ者、「蜘蛛塚治部九郎とて、年は十九歳にて、算



写真7 2ウ・3オ



写真8 3ウ・4オ

筆はもちろん武芸も人並に優れたる浪人あり。これを養子にし給へ」と仲立ちせしかば、知右衛門も、日頃講中なる由の右衛門が世話する事なれば、早速相談をとり極め、「先方は貧しき者也と聞けば」とて、内々に金子十兩遣はしけり。
 へとかく人を選びますれば、いかやうに貧窮でも、頓着はござらぬ。一通りの支度は、この方から心付けませう。
 へ今年も相変はらず、念仏講にはお招き申したい。とかく念仏はありがたい事じゃござらぬか。

へちとおぬるうござります。

へ厄介といつてはお袋一人。これもよさそうな人でござります。

由の右衛門云へお世話いたす治部九郎殿は、もと伊豆国のある大家

に仕へられました人の御子息にて、武芸は大抵や大方の修行じやござりませぬとさ。うつてつけじや。

「4ウ5オ」

こ、に又、なごや村のかたほとりに、蜘蛛治部九郎といふ武士の浪人あり。もとは大森実頼譜代の家子なりしが、治部九郎心よからぬ者に、たび／＼家の法度を破りしかば、ついに身の暇を給はりて浪々し、母親蜘蛛と、もに鎌倉へ立越へて、かすかなる暮らししてありけるが、彼ら親子は、もと軽薄の佞人なれば、仮初の人に付き合ふにも、物事慇懃に見せかけて、よく人の気を取りければ、村長由の右衛門も、己が律儀なる心より、治部九郎親子をよき人と思ひて、藤坂知右衛門方へ養子の世話をいたしけるに、何事も縁つくにて、早速熟談し、あまつさへ支度金として、内々十両の金を知右衛門方より送りつけられ、治部九郎親子は深く喜び、たゞ由の右衛門を神仏のごとく尊敬し、さまざま厚くもてなしけり。

へとかく人を選めば、いかほど貧窮でも、それは構はれませぬ。し

かし、世間もあれば、一通りの支度してござるやうにとて、支度

金十両渡されました。

へこれは／＼段々のお世話。ひとへに親分のお働きゆへと、大慶に

存じます。

へ倅、何ぞ御馳走申しや。こんな事でなけりや、神棚様もお神酒に

や縁遠い。ヲホ、、、。

へこのような牡丹餅で尻を叩かれるやうな旨い口は、又とないものでござりますてや。

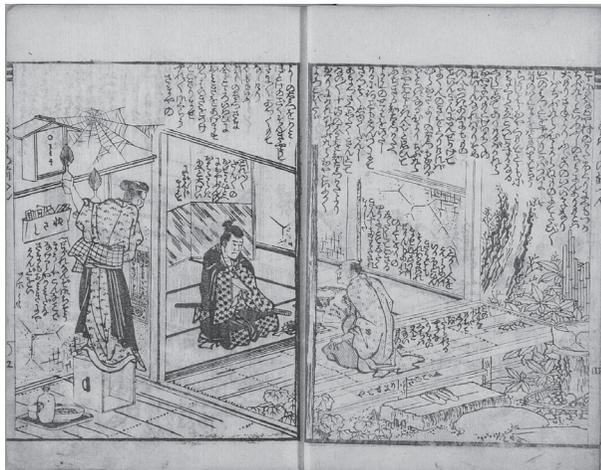


写真9 4ウ5オ

「5ウ」

ある日、藤坂知右衛門が門へ、一人の旅僧た、ずみて、内の様子をつく／＼とさし覗き、「この家には、まさしく実子のあるものを、由な

「き養子をする事よ」と呟きけるを、知右衛門窓より漏れ聞きて、深く怪しみ、かの旅僧を呼び入れて、そのゆへを問へば、旅僧言ふやう、「御身は実子なしと思ひ給へども、骨肉の男子ありて、今年十五才也よく〜思ひ出し給へ」とぞ言ひける。

へハテ心得ぬ。

へなう〜お宿申ませう。

へこの家には実子のあるに、由ない養子をせんとして、災ひを引き出す事、過去の因縁ならん。ア、是非もない事じや。南無阿弥陀



写真 10 5ウ

「6才」
その時、知右衛門しばし思案して、「それがしまつたく子を持ちし覚えなし。たゞし、十六か年以前、つきくさといふ妾を置きしに、本妻の嫉妬深かりしかば、たゞ一年ばかりにして親里へ帰せしが、つきくさ深く別れを悲しみけるにぞ、いと不憫に覚えて、家の重宝たる法然

上人のあそばせし十字の名号を取らせたり。しかれども、かのつきくさは、その頃懐胎の気色も見えざりし。このほかに覚えなし」と申ければ、旅僧頷いて、「これなり〜。かのつきくさは、その頃懐胎して二ヶ月なりしが、親里へ帰りて男子を産み、母は産後に憊くなりぬ。かの者の親族も、段々に死に絶へて、生まれたる子は今、伊勢国宮川なる酒屋に奉公し、実太郎と呼ばれる、也。たゞ一日も早く訪ね行き、親子の名乗りし給へ」とぞ教へける。

へさて〜存じよらぬ。おかげで子を一人拾いました。

旅僧の言ふへその名号は、世に稀なる真筆じや。しかし、御身の名号によつて災ひにあひ、又かの名号によつて幸ひあらん。これみな因果の道理なり。よく〜慎み給へ。



写真 11 6オ

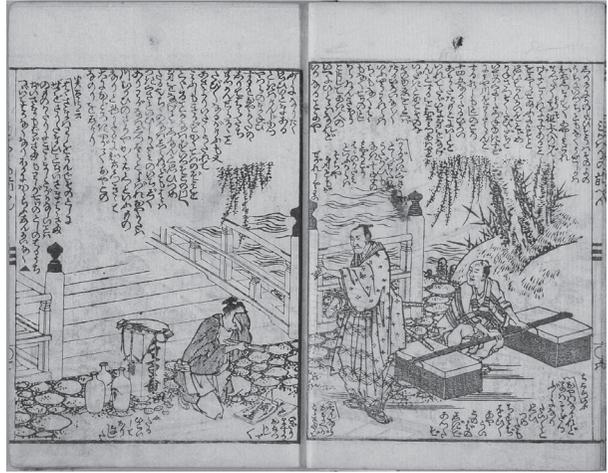


写真 12 6ウ・7オ

「6ウ7オ」
 しかるに、かの旅僧は、その夜のうちに何地ともなく失せしかは、知
 右衛門ますく怪しみ、「これまつたく、高祖上人の現化にて、我に
 子ある事を知らせ給ふにこそ」と思ひて、感涙を止めかね、早速旅立
 ちて、伊勢国に訪ね行き、すでに宮川を渡らんとする折しも、年の頃
 十四五なる樽拾い、あまた袂に石を入れて、たゞ今身を投げんとする
 を、知右衛門あはやと抱き止めて、その名・そのゆゑを問へば、樽拾
 い泣く／＼言ふやう、「我らは父もなく母もなく、七つの年から年季

奉公して、商人の家に人とはなれど、いかなる事にや、武士になりた
 く思ひ、暇ある時は剣術・柔の学びするを、親方罵りて腹立ち、折檻
 せらる、事度々なるが、今日も又、朝よりいたく打たれて、身節もき
 かず。かくては望みを遂ぐる事叶はず。いつその川へ身を投げて死
 なんと思ひ詰めたる也。父の名は知らねども、母はつききさといひし
 形見の一軸あり。我が名は実太郎と呼ばれ、親方は川向かひの酒屋角
 右衛門といふ者なり」と物語るに、知右衛門聞きて大に驚き、やがて
 親子の名乗りをしけり。

「我がつききさにと取らせたる、疑ひもなき十字の名号。母の形見と
 いふからは、そちや身どもが倅しやわい。」

知右衛門言ふ「親はなけれど子は育つ。武士になりたひくと、思
 ひ詰めたも血筋を引く。危ういこの場の仕儀であつ
 たぞ。」

「そんならお前が父様でござりますか。お懐かしい。」

実太郎云「母様はわしを産んで、その年に世を去り給ひしと、爺
 様・婆様の物語に聞きましたが、悲しい事は、爺様も婆
 様も、わしが七つの年の春、うち続いて儂くなり、ほか
 に関らふ親類なく、樽拾いしておりました。」

「7ウ8オ」
 かくて藤坂知右衛門は、実太郎を同道して、酒屋角右衛門が家に至り、
 委細の訳を物語して、年頃養育の一札として、金子廿両を角右衛門に

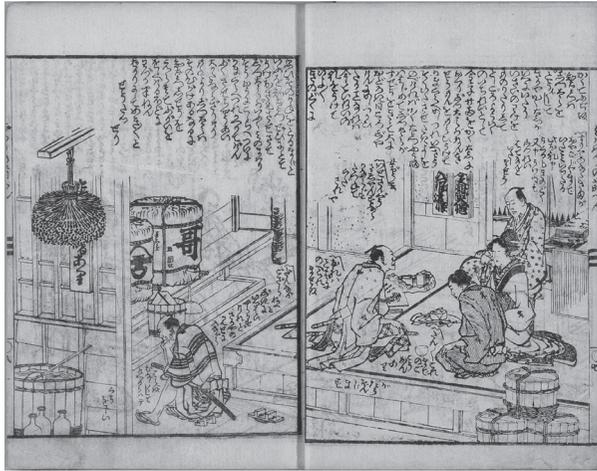


写真 13 7ウ・8オ

贈り、実太郎が年季証文を貰ひ受けて、鎌倉へ召し連れ、家相続いた
 させたき由を述べければ、角右衛門夫婦は、初めて実太郎が素性を聞
 きて大に驚き、日頃邪慳に召し使ひたる事なれば、今丁寧の札を受け
 て、いよく気の毒に思ひ、その金を取るまじと言ふを、知右衛門是
 非にとて受け納めさせ、さて、実太郎が衣服・身の回り、相応に拵へ、
 ついに鎌倉へ連れ帰りて元服させ、寵愛大方ならざりけり。もとより
 実太郎は、その心がけあるなるに、知右衛門師匠を選びて、武芸を教
 へける程に、わづか半年ばかりにして、めきくと上達せり。



写真 14 8ウ・9オ

へすりや、あなた様が親御じやまで。痛み入つたる此お札、申受く
 るも気の毒、又申受けぬも失礼。はて何といたしませう。
 女房云へ伊勢参宮さしやんすなら、必ず訪ねて下されや。
 へ段々これまでの御高恩、ありがたう存じます。
 へお札は言葉に述べられませぬ。
 へ旦那がござらねへと、直に一杯やらかすけれど、酒屋の店に入な
 がら、腹を空しくして帰るか。ハテ口惜しい。

「8ウ9オ」

蜘蛛塚治部九郎親子は、思ひもかけず十兩の支度金を得て大に喜び、俄かに衣服身の回りを調べて、足入れの日を待つに、知右衛門俄かに伊勢参宮せしとて埒明かず。親子長くなり短くなり待ちわびたるに、三十日余りを経て、知右衛門やうやく帰りしが、宮川のほとりより、実子実太郎といふ者を伴ひ帰りしと風聞するゆへ、「こは心得ず」と思ふ折しも、知右衛門方より、仲人由の右衛門をもつて、委細の事訊を言はせ、「気の毒ながら、養子変改いたしたし」と、俄かに断りに及びしかば、治部九郎親子は、案に相違して大に憤り、由の右衛門が止むるをも聞かず、親子もろ共に知右衛門が家に至りて、散々に悪口し、以ての外に騒ぎければ、知右衛門は初めて、彼らが心ざまのよからぬを知つて取り合はず、支度金十兩のほかに、手切金廿兩を遣はして、ことゆへなく済ましけり。治部九郎親子は、すでに三十兩の金を得たれども、さすがに面目なくやありけん、程もなく鎌倉を引払ひて、行方も知れずなりにけり。しかれども、なほ近きほとりに隠れあるにや、切戸の文殊にて治部九郎を見かけしといふ者もありしとぞ。

へこう起こり立つては、箒を立て、も聲ほども聞かぬ。

へ実太郎元服

へ親父様、あのやうな無法者にお構いなされますな。

へ余りといへば法外千万。

へこりや治部九郎殿、なんぼぢぶくらうと思はつしやつても、由の右衛門が来ては、ぢぶくらせる事じやない。まあ〜静かにさつ

しやりませ。

へ女に言はれて悔しくは、こ、へ出て勝負しろ。腰抜け親父めが。

へ治部九郎は武士だぞよ。うぬよくちつとの間、嬉しい目をさせて遊びやあがつたな。

へこちの息子殿、そうだ〜、所詮破れかぶれ。思入れ毒づいて、業を晒さねば腹か居ぬ。

「9ウ10オ」

その頃、管領氏兼朝臣の奥方常盤井御前は、大和琴を好み給ひしかば、京都より貌美葉とて、今年十六才なりける腰元を召し抱へ給ひしが、かの貌美葉はきりう発明人に優れ、爪音も又類なかりけり。かくて氏兼朝臣、ある夜、奥へ入らせ給ひしかば、常盤井御前は殿を慰め申さんために、貌美葉に琴を弾かせ給ふ。その調べ、峰の松風音つれて、軒打つ雨に異ならず、声は又鶯の谷の戸渡ることくなれば、氏兼朝臣殊更に賞美あつて、その後、奥方へ対面の折しも、しば〜貌美葉が事を言ひ出て、ひたすらに褒め給ひしを、常盤井御前「さては、殿には貌美葉に心をかけ給ふにこそ」と推量して、たちまち嫉妬の炎を燃やし給へども、定かにも聞こへ給はぬを、はしたなくはからふべきにあらねば、たゞうつら〜と思ひ煩ひ、つひに病の床に臥し給ひぬ。氏兼朝臣は、色欲の心もて貌美葉を褒め給ひしにあらねば、か、るべしとは思ひもかけず、京・鎌倉の名医を招き、奥方の療治、さまざまに手を尽くさし給へり。

〔10ウ〕
 かくて、常盤井御前の病氣、日を追つて重らせ給へは、付きぐくの女

〔10ウ〕
 足利氏兼、貌美葉を褒め給ふ。
 貌美葉が父は、山城深草辺の郷侍じやそうにござります。
 へさてく世に稀なる爪音じや。立ち振る舞ひといひ物腰とい、
 由ある者の娘と見ゆる。
 落といふも草の名、茗荷がといふも草の名、富貴自在徳ありて、
 冥加あらせ給へや。



写真 15 9ウ・10オ

中、立代はり入代はり、昼夜怠りなく看病し参らせけるに、ある夜、
 常盤井御前、すやぐくと微睡み給ふと見えしが、たちまち一団の火の
 玉、臥所の内より燃え出つ、長局の方へ飛び行ければ、殿籠りせ
 し女中たち、互いに目と目を見合はせて、「さては、今度の御病氣、
 本復あらん事は覚束なし」と囁きけり。
 へ必ず誰にも言いふまいそや。沙汰なしぐ。
 へ常盤井御前の懐より火の玉燃え出て、長局の方へ飛び行く。



写真 16 10ウ

〔11オ〕
 しかるにその夜、貌美葉は非番にてありしかば、部屋に下がりて休息
 し、夜長の頃の徒然に、朋輩の女中を呼び集へ、歌がるたを取つて楽
 しみるたる折りしも、たちまち家鳴り震動して、鞆のことき火の玉、
 奥御殿の方より飛び来り、貌美葉が頭の上へ、真一文字に落ちかゝり
 て、ついに跡なくなりければ、有り合ふ女中たち大に驚き、肝を金行

灯と共に潰して、立ち騒ぐ事大方ならず。「昼は消へつ、夜は燃えて」と詠みかけし歌の祟りかと、皆々呆れ惑ひけり。

へそれく炭団の幽霊じや。誰も火傷はさしやんせぬか。
へなふかなしや、なんとせう。



写真17 11才

「11ウ12才」

さて、うち消したる灯火をつけてよく見るに、別に怪しと思ふ事もなく、貌美葉はのけさまにうち臥しつ、気を失ふてありしかば、皆々大に驚き、「薬よ」「水よ」とてさまぐに介抱するに、しばらくありて人心はつきにけれど、俄かに発熱して、悶へ苦しむ事大方ならねば、やがて臥所に助け入れ、早速医者を招きて、薬飲ませなどするに、貌美葉はいよく物狂はしくなりて、親里へ帰るとて、駆け出す事度々なり。これを取り押さへんとする者、たちまち取つて投げられ、大の男四五人、惣かゝりにすれども、なほ手に余りて見へしかば、奥家老歌野与太夫、事の由を聞いて、氏兼朝臣へ申上げ、「とかく彼が

望みのごとく、故郷へ帰し給はんか」と申ければ、氏兼朝臣聞こし召して、「かゝる物狂ひを召し抱へ置くとも、その甲斐なし。はやく暇を取らせよ」と仰せけるにぞ。与太夫受け給はり貌美葉を通し駕籠にて、親里へ送り遣はしける。この頃より氏兼朝臣も心地例ならず見え給へり。

へ担いでかゝる勝山を、ちよつと私が投島田、島田崩しに崩れ立つ、ところを沈んで片はづし、そつちのあしは乱れ髪、どりや取り上げてみよかいな。

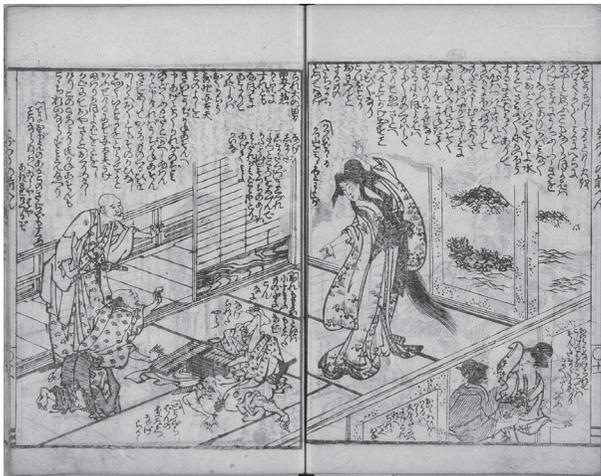


写真18 11ウ・12才

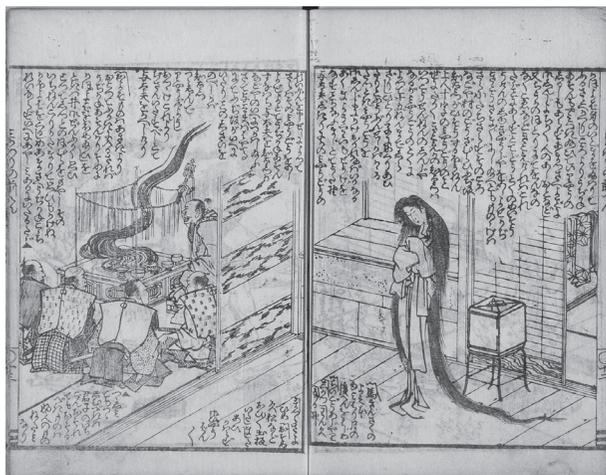


写真 19 12ウ・13オ

「おれも若いときは小相撲もとつた者だに、なぜこんなに投げられ
たやら。
へ手に覚えのあるこの匙でも、すくふことはならぬはへ。医者はや
呆れけへるぞ。
へ錠口番の木工左衛門投げらるゝ。
へおいらも投げられて、帯下でも起こつては損だ。まだ嫁入り前だ
になふ。
へおいらはひが、悪いから、大股には投げられねへ。ぢれつてへは
な。

「12ウ13オ」

貌美葉身の暇を給はりて、故郷へ帰りし頃より、氏兼朝臣も病みつき
給ひて、医療の験もあらず、あまつさへ、夜毎に御寝所近く、人の足
音などし、又廊下のほとりにて、女の泣く声など聞こえければ、「こ
れた事にあらず」とて、道德の名僧・有験の修行者を召し寄せ、
加持祈禱さまざまにし給へども、物の怪はさらに立ち去らず。その
頃、なごや村の郷侍藤坂知右衛門が秘蔵する、法然上人十字の名号
の事、世に高く聞こえ、「かの知右衛門は、一向専念の信者なるが、
名号の徳によつて、十五年まで知らざりし一人子にめぐり逢ひたり」
と風聞せしかば、「かゝる尊き名号を、御寝所に掛け置かれなば、い
かなる悪魔・妖怪も、障礙をなす事叶ふまじ」とて、歌野与太夫、し
きりにかの名号の靈験を申せしによつて、「さらば、その名号を召し
寄せよ」とて、氏兼朝臣、すなはち与太夫を知右衛門がなごやの家に
遣はし給ふ。さて与太夫は、早馬にて藤坂が家に至り、事の子細を述
べしかば、知右衛門謹んで了承し、「追付これより持参いたすべし」
とて、与太夫を帰しけり。

へおよそ、物は浅きより起こつて深きに入る。されば、氏兼朝臣仮
初に貌美葉を褒め給ひしを、常盤井御前深く思ひとつて、嫉妬の
炎を燃やし、その一念凝り固まりて、思ひもかけぬ貌美葉を苦し
め、あまさへ、氏兼心地例ならず、家に怪しみあるに至る。たゞ
慎みても慎むべきは君子の一言、畏れても畏るべきものは婦人の
物妬みなり。

馬琴作の読本、弓張月の後編を初め、頼豪阿闍梨へ三勝へ腕久へ鳴神へ松浦佐用媛へお染久松など、追々出板いたしました。相変らず御評判〜。



写真 20 13ウ14オ

「13ウ14オ」
藤坂知右衛門は思ひもかけず、管領家より使者を給はりしかば、「家の面目、身の大慶」と、早速御受け申て、まづ与太夫を帰し、俄かに湯浴みし髪結ひて、出仕の支度するに、その日もすでに暮れにけれど、事延び〜にすべきにあらねは、かの名号を懐中し、僕に提灯ともさ



写真 21 14ウ15オ

せて、氏兼朝臣の御所へとて急ぎける。しかるに、蜘蛛塚部九郎は、過ぎつる頃、知右衛門をゆすりて三十兩の手切金を得たれども、なほ飽く事を知らず、とかく養子の事を破談されたるを無念に思ひ、「いかにもしてこの恨みを晴らさん」とて、密かに腰越の片ほとりを転宅し、深く引籠りて人に見へず、夜なく知右衛門が家のほとりを徘徊して、その隙を窺ひけるに、この日、知右衛門は管領家の召しによつて、十字の名号を持参して、氏兼朝臣の御所へ赴く事を、いかゞしてか治部九郎聞き知りて、「これ究竟なり」と大に喜び、日暮れたる

を幸ひに、人なき原に待ち伏せし、僕が持ちし提灯を、無二無三に切り落として、知右衛門に打つてかゝるを、知右衛門は「心得たり」と抜き合はし、しばし挑み戦ひけるが、老人の悲しさは、進退も心にまかせず、木の根にはたと消し飛んで、ついにやみくくと打たれけり。

へこの名号まで手に入るとは、こつちの運の回り口。細言いはずと黙つてくたばれ。

へ人非人の治部九郎、大切なるその名号、尋常に返すまいか。

へおいらがやうに役のつかぬ者は、早く臆病口へ追ひ込まれるがい、。

「14ウ15オ」

藤坂実太郎は、優れて孝心深き者なれば、父が夜更けて管領の御所へ参るを、心許なく思ひ、「我が身をもし連れられ候へ」と言ひしを、知右衛門うち笑つて、「親子もろ共に参らんはいかゞなり。汝は留守せよ」とて出行きしが、実太郎は何となく胸騒ぎするにぞ、いよく覚束なくて、俄かに下男に提灯ともさせ、父が跡を慕ひつゝ、行く事十町余りにして、とある松原にさしか、れば、こはいかに、血潮夥しく滴りて、伏したる者は我が父なり。「あはや」と駆け寄り、抱き起こし呼び生くれども、その甲斐もなく、あたり見回して、「今一ト足早かりせば、かゝる嘆きはせまいもの。誰とは知らねど、父の敵遠くは行かじ」と言ふ声とともに、かしこの木陰より、はつしと打つたる手裏剣を、受くる提灯うち消され、闇はあやなし、治部九郎は足

早にそこを立ち退き、母親蜘蛛手を急がして、その夜のうちに腰越を出立し、都をさして上りしを、知る者絶えてなかりけり。

へ過ぎつる頃、怪しき旅僧知右衛門に示して、「かの名号によつて、

幸ひあり又災ひあるべし」と言へりし事違はず、かほと尊き一軸

なれども、知右衛門が横死を救ひ給はざりしぞ、まことに前世の

因果なるべき。しかはあれ、二代信心の奇特によつて、実太郎、

つひに家を興すに至る事、みな名号の加護により。詳しきを知

らんとならば、後編を見給ふべし。

へウさては。

「15ウ」

実太郎は父を打たれて、敵も定かならざれど、かくてあるべきにあらねば、父が死骸を昇きもて帰り再び管領の御所に参りて、歌野与太夫に対面し、知右衛門が横死、名号紛失の事、詳らかに申し述べ、「何とぞ敵討免許の御教書をなし下されなば、敵定かならずとも、つひには本望を遂げて、名号を取り戻し候はん」と願ひければ、与太夫も事の由を聞いて、いと本意なく思ひ、かつ実太郎が孝心を感じて、御教書を申おろし、一刻も早く敵を尋ね出し、早々名号を差し上げらるべし」と言ひ渡しぬ。

へさてく驚き入たる珍事でござる。少しも敵の手が、りはござらぬか。

へ敵知れねばとて、このまゝに止むべきにあらねど、差し当たつ

曲亭馬琴作

文化丁辰和三月癸卯

たるこの身の本意なご、御推量下さりませ。

國これまでは此草紙さうしの前編へんなり。後編へん三冊さつう売り出しおき申候。御求御覽可被下候。版元鶴屋



写真 22 15 ウ

〔付記〕

資料の掲載を許可していただいた、蓬左文庫に深謝申し上げます。
 なお、本研究は JSPS 科研費（若手研究 課題番号：18K12301）における成果の一部である。

Abstract*Katakiuchi-Migawari-Myogo:*
A Review of the Subject and Transliteration (Part I)

Kazunori NAKAO

This paper is a transliteration of *Katakiuchi-Migawari-Myogo*, first published in 1808, with brief commentary added. This work is a tale of vengeance on the theme of *Migawari* (Scapegoats) with the ten-letter *Myogo* (Buddha's name) written by *Shinran*. I have previously argued that Bakin digested this device and effectively used it in his *Yomihon* works. However, the *Migawari* taken up in those works is from a drama in which he dies to save others from their troubles. Therefore, my primary focus was not on the tale of the miraculous efficacy of the gods and Buddha as seen in this work. It is my opinion that this type of *Migawari* is more often found in Bakin's *Gokan* works. The work introduced here can be regarded as pushing this preference to the forefront, which was the impetus for writing this paper.

Keywords: Kyokutei Bakin (1767-1848), *Gokan* (one type of illustrated novel), drama, *Migawari* (Scapegoats)